

布施の「舟入」と因幡国守護所天神山城の構造

錦織 勤*

The Ship dock in Fuse, and the Structure of Tenjin-yama Castle owned by the Ruler of the Province of Inaba

NISHIKORI Tsutomu

キーワード：堀跡，運河，山名氏，商業地

Key Words : ruins of a ditch, canal, Yamana family, business district

1. はじめに

古代・中世の因幡国が，交通上，外の世界とどのように繋がっていたのかという問題は，地域の歴史を考える上で最重要課題の一つである。陸路については少ないながら好史料⁽¹⁾に恵まれ，ある程度窺い知ることができるが，海路の場合は，まだほとんど何もわかっていないといわなければならない。例えば，因幡最大の千代川流域圏について，海港がどこだったのかという基本的なところすら，明らかになっていないのである。



図1 天神山・卯山周辺（2万5千分1の地形地名・湖岸線などを書き入れている）

この問題については，従来，確かな史料的裏付けのないままに，河口の賀露が想定されてきたと思う。しかし，河口というのは砂に埋もれやすく，流路の変化ということもあって，安定的な港の維持しにくい場所である⁽²⁾。そのため，日本海側では潟湖が港として利用されることが多かった。そのことは森浩一らがすでに指摘しているところである⁽³⁾。

こうした研究や近年の地学の研究成果⁽⁴⁾に触発されて，私は別稿⁽⁵⁾で，中世の湖山池は湖山川を介することなく，北部で日本海と直接つながっていたこと，湖山池北東岸の溝口（みぞのくち。鳥取大学のすぐ西に小字として残る）には潟港⁽⁶⁾があったこと，このことと深く関わって，布施（鳥取市布勢）の商業地としての繁栄があったこと，などについて論じた。

*鳥取大学地域学部教授（地域環境学科）



図2 寛文大図(部分): 倉田八幡宮(鳥取市馬場)所蔵

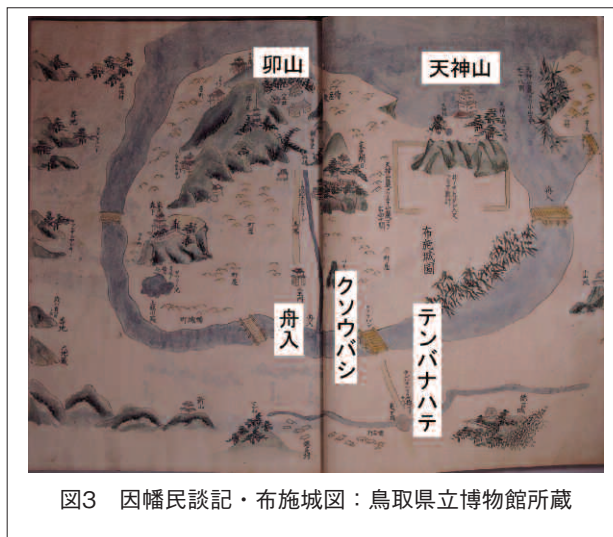


図3 因幡民談記・布施城図: 鳥取県立博物館所蔵

ただ、そうした主張をするためには、布施が天神山城の城下町だったとする、根強い固定観念を崩しておく必要がある。そのことはそれほど難しいことではなく、天神山城の構造をきちんと解明することによって達成されると思われる。こうした問題意識に立ち、本稿では、天神山城の復原的研究に取り組むことにしたい。

なおこの問題は、上記のような必要性からだけでなく、因幡守護山名氏の本拠(守護所)天神山城の研究それ自体としても、求められていると思う。南北朝～戦国期の守護所のうち、所在地が明らかになっている

ものは、全国的にみてもそう多くない。そうしたなかで、天神山城は守護所であることは確かであるし、場所もはっきりしている。因幡だけでなく、日本全体の中世史を考える上でも、きわめて貴重な遺跡であることは論をまたない。それにもかかわらず、天神山城の構造に関しては、まだ基本的なところで意見が分かれているのである。

2. 築城時期について

本題にはいる前に、天神山城の築城時期について触れておきたい。このことに関しては、明確な記録は残っていない

が、次のような事実から見ると、応仁・文明の乱（1467～77）前後に画期があると考えてよさそうである。

あ) これまでの発掘成果を整理した中森祥が「発掘調査によって出土した遺物から、文献史に記されたように15世紀後半から16世紀前半にかけての遺跡であることがわかった」⁽⁷⁾としていること。

い) 江戸時代の地誌⁽⁸⁾が乱前後の築城としていること。

う) 最近の守護所・城下町研究⁽⁹⁾が、そのところに大きな画期があったと論じていること。

ただ、それ以前には何もなかったということではない。応仁・文明の乱の戦記「応仁記」⁽¹⁰⁾は、文明5年（1473）に近い時期の著作と考えられていて、信憑性の高いものであるが、応仁元年（1467）5月26日の記事に、因幡守護とともに山名同名の布施左衛門佐という人物が出てくる。これによって、それ以前から布施を本拠とする山名一族がいたことが明らかになる。しかも同じ記事に因幡守護が出てきているから、左衛門佐は守護ではない。これは恐らく次のようなことなのであろう。

う) で触れた最近の研究は、それまで守護（代）館ぐらいしかなかった守護所が、応仁・文明の乱後に整備・拡充されていくことを明らかにしている。とすると因幡でも、もともと守護代クラスのものゝ布施に館を構えていた、そこへ応仁・文明の乱ごろに守護も館を構え、本格的に守護所として整備された、というようなことが想像できるのではないか。考古遺物がそのことを反映していないのは、発掘された場所が全体としてみるとごくわずかであることや、乱以前には、山名一族が住んでいたといっても、それほど的人数ではなく、施設としても貧弱だったためではないだろうか。

なお廢城の時期は、永禄6年（1563）12月に武田氏との戦いに敗れて、守護山名豊数が城から退去した時と考えられる⁽¹¹⁾。

3. 研究史の整理

天神山城は山の頂部に削平地があり、そこは県の史跡に指定されている。しかし、守護所の中核部のある平地部分はすべて地中に埋もれ、地表面に明瞭な痕跡を残していない。そのため、これまでいくつかの復原的研究がなされてきたが、いまのところ意見の一致をみしていない。私も以前、先学の驥尾に付して、天神山城の復原図を作ったことがある。しかし、それは考えの足りない、誠に不十分なもので、明らかな誤りもいくつかあった。この機会に拙稿も含めて、これまでの研究を見直して、新たな復原案を提示したいと思う。

古くは寛文年間（1661～72）作成とされる「寛文大図」⁽¹²⁾（図2）や、元禄元年（1688）ごろに成立した『因幡民談記』（以下、民談記と略す）⁽¹³⁾に載せられている「布施城図」（図3）があるが、近年の研究は下記のようなものである。

ア、中林保「城下町の形成」⁽¹⁴⁾

イ、中林保「中世の土豪と城」⁽¹⁵⁾

ウ、小坂博之「因幡布施城について－因幡国守護所と城郭－」⁽¹⁶⁾

エ、吉田浅雄「天神山城」⁽¹⁷⁾

オ、小坂博之「因幡布施城の守護居館について」⁽¹⁸⁾

カ、吉田浅雄「因幡国守護府布施天神山城跡要図」⁽¹⁹⁾

キ、錦織勤「布施天神山城の復原的研究」⁽²⁰⁾

ク、八峠興「布施天神山城についての試論－発掘調査と絵図の接点－」⁽²¹⁾

ケ、八峠興「鳥取における山名氏の展開について」⁽²²⁾

コ、錦織勤「天神山城の構造について」⁽²³⁾

サ、小坂博之「因幡守護所布施城についての史的考察」⁽²⁴⁾

シ、小坂博之「因幡守護所『布施城』中世城館の実態」⁽²⁵⁾

ス、中森祥「因幡守護所・天神山城跡の構造」⁽²⁶⁾

中林アには概念図が載せられているが、これは部分的には明治の地籍図を踏まえつつも、全体としては民談記の図を現在の地形に重ね合わせたものである(図4)。この図には非常に重要な記載があるが、それについては後に5・bで卯山の周辺の堀を考えるときに、触れる予定である。イは天神山周辺の明治の地籍図をトレースしたものであるが、残念ながら復原図は作成されていない。

吉田エ・カは主として明治22年の地籍図による復原である(カは版が大きくて掲載できないので、エによって述べる。図5)。特徴は、天神山の東側に南北方向に伸びる3列の堀を描いている点にある。また、エでは明瞭ではないが、カでは天神山南の2つの方形区画(図7でいえばⅢ・Ⅳ)の西側にも堀が明記されており、天神山の東の麓には、短い堀が東西に3本(図7のa・b・cに当たるところ)記されている。

小坂ウは概念図のようなものなので、ここでは取り上げない。オは、天保10年(1839)~15年に

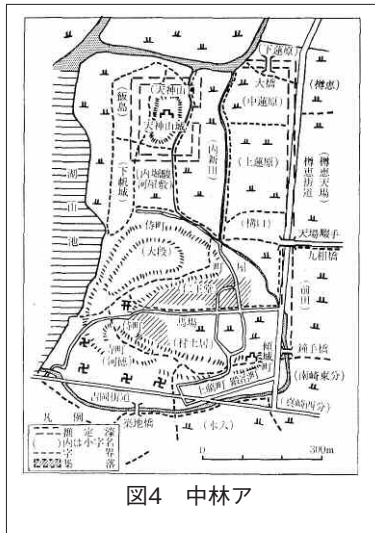


図4 中林ア

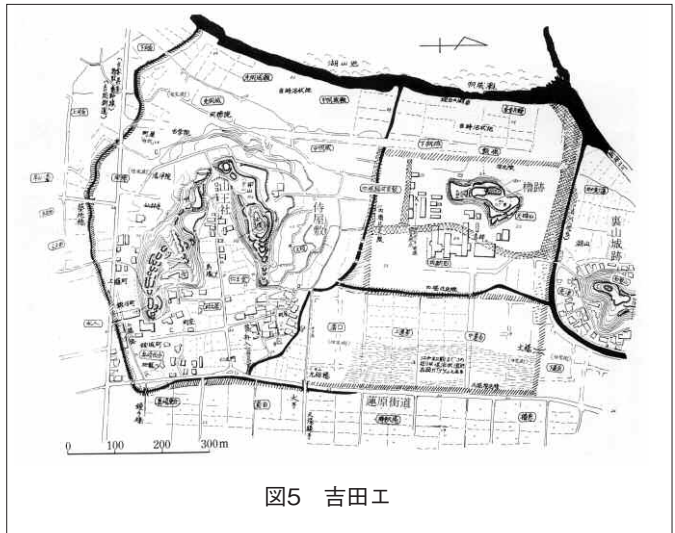


図5 吉田エ

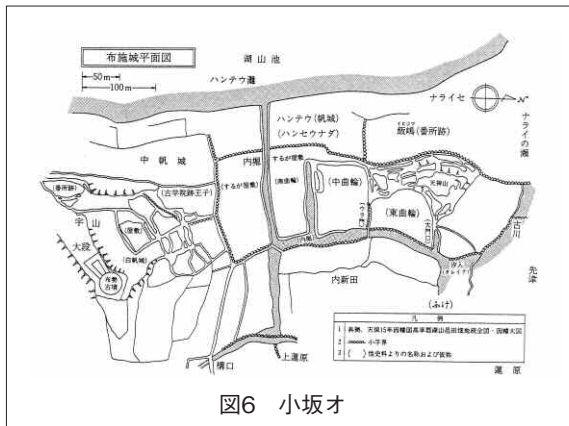


図6 小坂オ

鳥取藩が村ごとに作成した「田畑地続全図」(以下、全図と呼ぶ。全図については後述)を利用した、最初の研究である(図6)。全図は測量に基づく図で、かなり正確なものである。これを利用して復原図を作成する方途があることを示したことは、重要な意味がある。復原図は天神山周辺を対象としているが、注意すべきは、天神山南の東西方向の堀のうち、南側のものは東からの堀(図7のgに当たる)につながっていて、しかもそのまま湖山池に流れ込むように描かれている点で

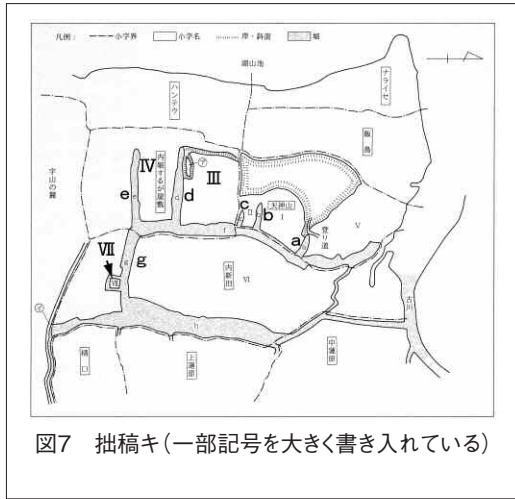


図7 拙稿キ(一部記号を大きく書き入れている)

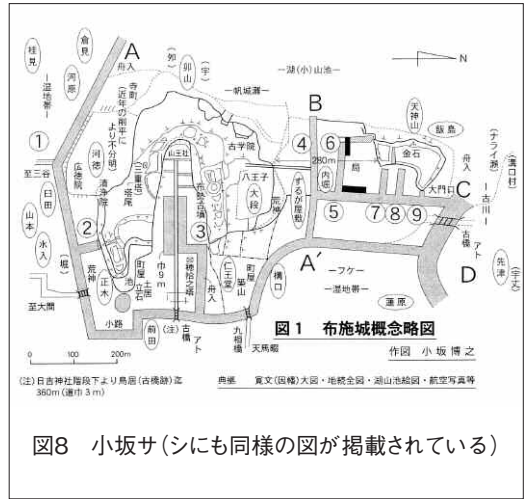


図8 小坂サ(シにも同様の図が掲載されている)

ある。

拙稿キでは、全図をもとに天神山周辺の復原図を作成した(図7)。天神山南側の堀 e は湖とつながっていないとしたこと、VIIのような特殊な区画を想定した点、などが他と異なっている。

八峠ケは、民談記の図を基本にして復原を試みたものである。その結果、従来のもの(エ・オ・カ・キ)とは違って、天神山周辺の堀が卯山を廻る堀と切り離され、独立したものとして描かれている。この点は正しいのであるが(後述参照)、民談記の図が著しく精度を欠くものであることは明瞭である。それに全面的に依拠している点に問題があることは、中森スが指摘する通りである。

小坂サ・シはウ・オの自説を再確認したものである(図8)。平地の守護所と天神山と卯山が一体となって布施城(天神山城)なのであり、卯山を抜きにして布施城はない、と主張している。

以上のごく簡単な整理によっても明らかなように、全図や地籍図という測量に基づく図面を利用したものであっても、各図には顕著な相違が認められる。特に見逃せないのは、上述のところでは触れなかったが、天神山・卯山を取り囲む堀について、その存在を認めることでは一致していながらも、それがどのようなものであったかについて、大きく異なっている点である。

卯山の南を山裾に沿って東に向かった堀は、卯山の南東端で直角に折れて北に向かい、日吉神社(山王社)の参道とぶつかる。そこまでは諸説一致しているが、その先については、上掲の5枚の図のなかだけでも三つに分かれている。そのまま真北に向かうとする論(中林ア=図4)、布施の集落の縁を通過して、そこから北に向かう堀を想定する論(小坂オ・サ・シ、錦織キ=図6~8)、どちらの堀もあったとするもの(吉田エ・カ=図5)の三つである。最初の説は民談記の図の影響下にあり、2番目は寛文大図が念頭ににあるということができる。

このような違いが生まれるのは、どこに原因があるのだろうか。拙稿キの場合でいうと、次のような反省点があるが、すべての研究に同種の問題点がある。

- ①関係地域全体の全図をトレースする必要があったのに、天神山周辺だけで復原案を考えたこと。
- ②全図の記載原則を押さえていなかったこと。具体的には畑田についての理解が誤っていた。
- ③全図を虚心坦懐に読まなかったこと。先行研究に引きずられてしまったところがある。
- ④寛文大図を参照すべきところでそれを怠ったこと。

こうした点を踏まえて、もう一度復原図の作成に取り組みたい。それによって、より確実な復原図

が作成できるはずである。

4. 復原図作成のための原則と基礎的作業

まず復原作業の原則を確認しておきたい。第1に、基本を全図におくこと。その理由は、明治の地籍図には欠失があり、全体をカバーできないことと(中林イ参照)、全図は明治の地籍図よりも古く、かつ情報量が多いことにある。具体的にいうと、畑田という地籍図にない地種があることが重要である。

畑田は、『日本国語大辞典』(小学館)では「はたけだ 畑と田。また、水を引かない田。すなわち、畑」とあるが、どれも全図の畑田の意味としては適切ではない。湖山村と布施村の全図の凡例には、「コ」字形の記号に関して、それぞれ「畑田成、元畑と之繋」、「畑田成、元畑と之筆繋キ」という説明がある。「畑田になったところと、元の畑との筆繋ぎ(の記号)」という意味である。つまり畑田は、畑が田に開作されたものなのである。水田化は、それを藩が把握していることからすると、江戸時代になってからのことであろう。畑田は戦国期には畑だったのであり、後述の堀跡検出基準①に照らせば、堀跡である可能性はないということになる。

第2に、江戸前期の二つの絵図は必要に応じて参照するが、全図に優先するものではないこと。二つの絵図とは、寛文大図と民談記「布施城図」である⁽⁷⁾。このうち寛文大図は記載内容については信頼性が高いので⁽⁸⁾、全図を検討していて判断に迷うような時に利用する。

ここで全図について述べておこう。鳥取県立博物館『資料調査報告書第二十四集 鳥取県立博物館所蔵土地関係絵図類』(1997年)の解説(北尾泰志執筆)によれば、19世紀の初めごろ、藩内の田畑の調査が計画された。江戸初期に作成された水帳・開作帳では、実際の田畑の状況を把握できなくなっていたからである。計画は最終的に、天保10年(1839)から同15年にかけて実施され、土地台帳(田畑字寄地続帳)、字ごとの絵図(田畑字限絵図)、村全体の図(田畑地続全図)が作成された。

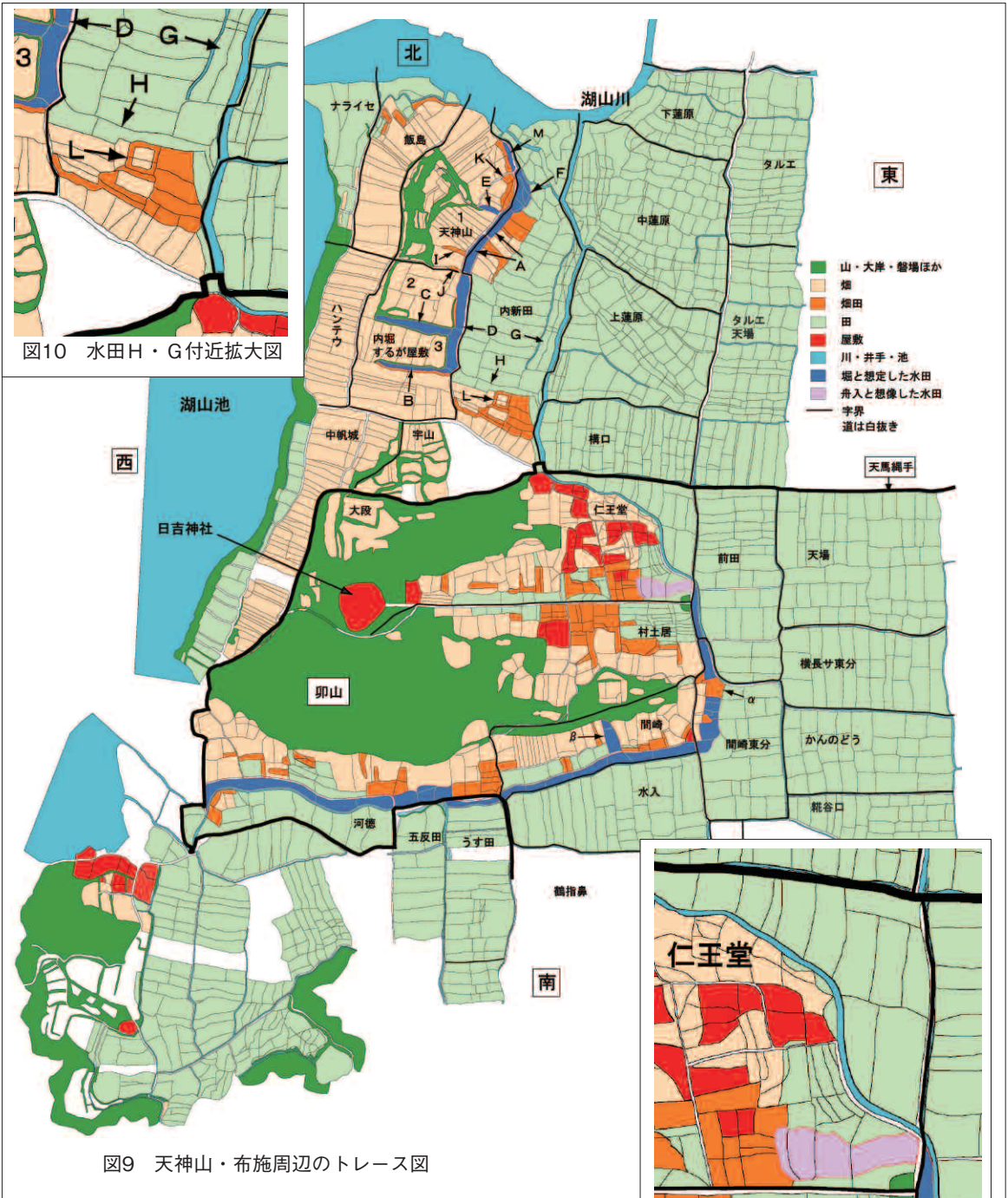
村の全体図である全図は、測量をもとに作成された縮尺600分1の精細な図で、近代の測量図ほどではないとしても、かなりな正確さをもっている。田・畑などは、一筆一筆が非常にリアルに表現されているといってよい。以下では、湖山・布施・倉見・三谷の4ヶ村の全図を利用し、足山村の全図も参照する。いずれも県立博物館所蔵のものである。

予め触れておかなければならないのは、湖山村(天神山のある地域)は布施村(卯山のある地域)の北だけでなく、湖岸を細く南に伸びて、布施の南側にまで回り込んでいること、倉見村は字「五反田」、三谷村は字「うす田」のところだけが、差し当たり必要な部分であること、などである。

作業はまず、4ヶ村の関係部分それぞれについて、イラストレーター(Adobe社のパソコン・ソフト)を使ってトレース図を作成し、その後、それらを合成した(図9)。ただ、合成とはいっても、近代の地図ほどの正確性はないため、きちんと接合できているわけではない。試行錯誤を重ねたが、うまくいかなかったので、湖山村の図の上に布施村(村境は太線)などを載せる形で作図している。その結果、湖山村に、布施村図の陰に隠れてしまうところが出てきた。

また湖山村の、卯山よりも南側のブロックは、北側のそれと切り離して南に少しずらしている。これによって布施村との接合はスムーズになったところがあるが、反面、卯山の南西の湖岸線が不明瞭になってしまっている。もう一つ、倉見村「五反田」・三谷村「うす田」と湖山村の図が重なるところがあるので、必要な部分をクリアにするために、湖山村のその部分は削除している。

最後に付け加えるべきは、あちこちにみえる白抜きの部分についてである。最も大きなものとし



ては、図の真ん中辺り、宇山・構口・仁王堂の間に三角形がみえる。ここは湖山村の東に接する足山村の飛び地である。足山村の全図では、その部分はほぼ四角形に描かれていて、

図11 参道付近拡大図

うまく当てはめることができないので、空白のままにした。この部分は地目としてはすべて畑である。また卯山の南西部に点在する白抜き部分は、湖山村と入り組んでいる他村の土地である。これは接合が難しいのと、差し当たりどうしても必要なところではないので、空白のまま残した。

結局のところ図9は、布施村・仁王堂と湖山村・構口の部分がうまく接合すること、その点だけを念頭において重ねた合わせたものといつてよい（それすら完全ではなく、湖山村のタルエ天場の部分が少し東西に広く、布施村の前田とズレが生じているが）。その部分がとりあえず連続的であれば、卯山・天神山周辺の堀の意味を考えるのに、大きな支障はないと考えたからである。

また図9では、堀跡と想定される水田を濃い青で表示している。結論を先に示したようなことになっているが、これはカラー図版を何枚も掲載することが難しかったためである。本来なら、複数の図を作業手順に従って順に出していくべきなのだが、やむを得なかった。以下の論述で、個別的に堀跡を検出していく時には、ここには掲げていない元図（堀を描き込んでいない段階のもの）から出発する。青の堀跡は元図では薄緑の水田なので、それを思い浮かべながら、以下の論におつきあいいただきたい。

5. 復原作業

a. 天神山周辺

最初に、天神山周辺の堀跡の検出から始めよう。その際、問題は何を基準に堀跡と認定するのかである。恣意的にならないようにするためには、統一的な基準が必要であるが、それは実のところなかなか難しい。ただ、以下の点は、押さえておきたいところである。

①この辺りでは、堀の跡は水田になっていると思われること。

これは大前提である。その上で堀跡を検出しようとする時、次の二つのことがいえるのではないか。

②畑の中の細長い水田は堀跡の可能性が高いこと。

③周囲が水田であっても、周りの地割と違う細長い水田は堀跡の可能性が高いこと。

②のケースでは悩むことはないが、③の場合、場所によっては判断に迷うものもある。そのような時は、個別的検討を踏まえつつ、主として寛文大図を参照して決めていくことになる。

図9では、問題となりそうな水田部分に、予め記号・矢印を入れているが、②に該当するものとしては、まずAがある。畑の中を通る細長い水田なので、堀跡であることは間違いない。B・Cも畑地の中に細長く伸びる水田であるから、同様である。Eも規模は小さいが同じように考えてよい。

③に該当するものとしてはDがある。A・B・Cをつなぐ堀跡として自然なものであること、寛文大図でもこの辺りに堀があったように描かれていること、などから堀跡と判断する。

水田Fは、その南端が畑・畑田を掘り割ったように見えるので（②に該当）堀跡とした。水田MもFにスムーズにつながる形なので、一応堀跡と考えることにした。しかし、F・Mの辺りは湖山池が迫っているところなので、当時の池の範囲・形によっては堀ではない可能性もある。

水田Hはどうか。拙稿キ（図7）ではB・Dに連なる堀跡と考えた。しかし、図10でわかるように、B・Dとのつながり部分が滑らかでないこと、東に行くにつれて細くなってゆき、末端が妙な形態になっていることなどから、堀跡とするには問題がある。さらに寛文大図では、この部分に堀が描かれていない点も重要である。これらの諸点を総合して、堀跡ではないと判断した。

水田Gとは、小川の西側に2列に連なる、南北に細長い水田のことである。周囲の水田と直角方

向の地割をなしていることから、堀跡のようにもみえる。これまでの復原図でも堀とするものが多かった。しかしこの連なりは、Hと接する一つ手前の水田までしか続いていない。堀だとする宙ぶらりんの奇妙なものになってしまう（図10参照）。

念のために、これまでの諸説のように、Gが卯山周辺の堀と繋がっている可能性はないか見てみると、Gのラインの延長線は水田Hを越えたところで畑田に遮られて、その先へは続いていかない。そこに接する小川も、幅が狭くて（約3～6m）堀跡とは認めがたい。卯山周辺の堀があったとしても、それには接続し得ないのである。こうしたことについては、次項でもう一度触れる。

これらの諸点からすると、Gは、川の小さな流路変更の跡が水田化したために、周囲と異なる形状になったものであり、堀跡ではないとすべきである。寛文大図で、水田Gの位置に外堀が廻っているように描かれているのは、この辺りの小川を堀跡と想像したのに過ぎないと思う。

I・J。ここは畑田である。前稿キでは堀跡としていたが、畑田は近世に畑が水田化したものなので、これは堀跡とすべきではなかった。畑田についての認識がなかったため、誤ってしまった。なお、この部分は明治の地籍図では水田になっている。地籍図だけだと、堀跡と考えることになるであろう。こういうところにも、全図の重要性があるといえる。KもLも畑田である。拙稿キではKをAに続く堀跡とみなし、Lはここに堀に囲まれた櫓台のようなものを想定していたが、いずれも誤りであった。

まとめると、図9に青で塗ったような堀が想定される。確認しておきたいのは、Bが湖山池まで続いていないことである。寛文大図では湖山池まで伸びるように描かれているが、それは池につながらないと、城地が閉じられた空間にならないので、想像を加えて描いたものであろう。全図から読み取れるところでは、この辺りに川は流れていないし、Bの水田も畑で遮られていて、池までは続いていない。このことは、Bのすぐ西まで池が迫っていた、という可能性もないことを意味している。江戸時代に畑だったところが、戦国期には池であったとは考えにくいからである。

また、区画2・3の西側には堀はないし、土塁もない。小坂シでは、区画2を西側で閉じるような土塁を想定し、土塁は全図に明記されているとしているが、この部分は小さな段差（崖）を描いたもので、土塁ではない。2・3の西側の防禦については、堀があったことは想像できるが、それ以上の詳しいことはわからない。今後の検討課題としたい。

b. 卯山周辺

続いて卯山周辺の堀の復原に入ろう。卯山というのは、日吉神社の鎮座する標高40mほどの小山である。これまでは卯山は天神山城の一部で、卯山の麓には城下町が広がっていた、と考えられてきた。そのイメージの源は、前掲諸図に明らかなように、卯山と天神山を取り囲む堀があるという認識にある。

それに対して拙稿キ・コでは、堀の存在は認めつつも、卯山は天神山城の一角ではないと主張した。卯山の周りの堀については、別の説明が可能だと考えたのである。しかし、それには強硬な反対論がある（小坂サ・シ）。理由が上述の認識にあることはいまでもないだろう。

しかし、これまでの研究によって、卯山・天神山を廻る堀が本当に検出・確定されていたのかというと、実は案外あやふやな話でしかなかった。そのことは堀の形について、論が大きく分かれていることから明らかであろう。そこで本項では、卯山周辺の堀はどのような形状だったのかという基本的なところを、全図に即して検討してみることにしたい。

まず南西端の河徳辺りから見ていこう。ここには先述の堀跡検出原則②③に当てはまる水田がある。ただ、②に当てはまるのは西の端の少しだけで、残りは③に該当する細長い水田である。その

東の五反田は倉見村の字名である。それらしい地割の水田はここに見出せないで、北に接する布施村(河徳)の方にある水田を、形に少し不自然なところはあるが、堀跡と考えよう。

続く「うす田」は三谷村の村域であるが、北端の水田を堀跡とみると、東の水入側と非常にうまくつながっていく。河徳の側では接合は滑らかとは言い難いところがあるが、前節で述べた図の性格を考慮し、つながっているものとして先に進む。水入と間崎の境目には③を満たす水田が続く。少し飛んで村土居の東側にも③に該当する水田が続いている。その中間の間崎東分には原則にあてはまる水田はないが、上記二つの堀をつなぐものとして不自然ではない地割が検出できる。寛文大図に描かれている堀と同じようなものが、水田の地割をたどっていくと復原できるといってよい。

ただ、その途中の畑田 α は問題である。ここは①の原則からいえば堀跡とするわけにはいかないが、この部分が途切れてしまうと、それ以外の堀が無に帰してしまう。何らかの事情で後年、畑(畑田)になっていたが、本来はこの部分も堀が続いていたと考えておいて、先に進みたい。

ひとつ面白いのは β の突起状の部分である。寛文大図にはちょうどその場所に、同じような形の堀が描かれている。そのことからすると、この水田は堀跡とみてよいと思う(小坂サ・シでも堀とされている)。このことは、寛文大図に記入された情報が正確であることを裏付ける事実でもある。ではこの部分は何のための堀か。舟入のようなものかとも想像されるが、確かなことはわからない。

さて、村土居・前田まではたどれた堀跡も、そこから北側には続いていかない。日吉神社参道付近から先は、真北の方向にも、布施集落(字・仁王堂付近)の東縁にも、堀跡と思われる水田はないのである。堀はここで途切れていたと考えざるを得ない(図11参照)。そこで注目されるのは図4(中林ア)で、図に記入されている実際にトレースされた堀が、参道辺りまでしか描かれていない点である。明治の地籍図によった作図と推測されるが、熟達の地理学者である中林の目によっても、それは参道までで終わっていたのである。堀がここまでしかなかったのは、動かないところであろう。

寛文大図が、堀がさらに北に向かって続くように描いているのは、布施集落の東縁を廻る小川を堀の名残りと解したためであろう。しかし小川の幅は狭く、全図で測ると3m前後しかなくて、これを堀跡と考えることは難しい。このことは、前項での水田Gに関する結論を裏付ける事実でもある。卯山の周辺の堀が参道の辺りで終わっているとしたら、その中間を抜いて、Gの位置に堀を掘ることに意味はないからである。

最後に触れておきたいのは、堀の西端が河徳までしか描けていないことについてである。これは基本的に全図の接合の難しさに由来している。この辺は湖山村・倉見村・布施村が入り組んで、接合の殊に困難な地域であった。前述のように、図9では湖山村の南端のブロックを南にずらしたため、湖岸線が不明瞭になっているが、ずらさないまま重ね合わせると、今度は集落が堀の先に立ちだかるようになってしまう。いずれにしても、河徳から西は、図上ではうまく池に繋がっていかないのが、寛文大図では倉見集落の北側に堀が流れ出るように描いていること、さらにここで途切れてしまったのでは堀の意味はなくなってしまうこと、などを考え併せると、堀が池と繋がっていたことは間違いないと思う。

c. 水路・舟入・布施集落

以上、堀は卯山の周り全体を廻っていたわけではなく、天神山周辺の堀とは接続していなかったことについて述べた。これによって、卯山を天神山城の一角とみる通説の根拠は失われたと思う。拙稿キで述べたように、卯山は城としての普請がなされていないことも考慮すれば、卯山が天神山

城の一部でないことは確実である。

では、卯山の周りの堀は何のための施設だったのか。手がかりは、寛文大図などで、日吉神社参道脇に入り込んでいる堀に書き込まれた、「舟入」という文字にある。同図の正確さを考えると、舟入の存在は認めてよいと思われる。そうすると、堀は舟入に通ずる水路だった、という可能性が出てくるのであるが、それでは舟入は何を目的に作られたものであろうか。寛文大図では舟入は日吉神社の石段の近くまで延びている。日吉神社への物資搬入のためとみえなくもないが、この辺りは天保の全図ではどうなっているのか。

該当する場所にそれらしい地割の水田を拾ってみると、一目瞭然というほどではないが、舟入とみることのできる地割はある。確証はないが、図9では一応その部分に色を塗っておいた。ただ、想定舟入の先は畑で遮られているから、寛文大図のような、そこからさらに西に延びて、日吉神社の石段近くまで続くという光景は復原できない⁽²⁹⁾。このことからすると、舟入は日吉神社との関係よりも、布施の集落との関わりで考える方がよさそうである。

詳しくは別稿で論じているが、卯山は平安中期以来、天台系寺院の並び建つ宗教的中心地であり、布施はその門前町・商業地として栄えた集落であった。戦国前期の史料である近江国堅田の「本福寺門徒記」⁽³⁰⁾に、近江の「タカシマ舟木北ハマノ左衛門五郎」の息子三郎左衛門が、「イナハノフセノニウワウ堂（因幡の布施の仁王堂）ノアタリニ」住んでいる、と記されている。仁王堂というのは布施の旧集落の辺りの字名、移り住んでいたのは16世紀初めのことと考えられる⁽³¹⁾。一向宗本福寺の門徒が舟木北浜から移住してきたのは、商業や布教のためと考えられるので、布施の商業地としての繁栄を窺わせる事実とみてよからう。湖山池から水路を引き舟入を造成する、ということはある得ることと思う。

6. おわりに

これまでの検討によって、以下のことが明らかになった。まず天神山城の構造について。天神山の東側にはごくシンプルな一重の堀しかなかった。南側には2本の堀があり、それらと山とによって、区画1～3の三つの空間が形成されていた。区画2の西側は小さな段差で区切られているが、これによって防禦できるほどの崖ではない。区画3にはそうした段差も認められない。残念ながら、2つの区画の西側の防禦については、詳しいことはわからない。三つの区画の外にも、山の北側や、西側にも空間があったと推定されている⁽³²⁾。これが守護所・天神山城麓部分の区画のほぼすべてである。小規模で、方形をベースにした単純な構造の城（居館）であった。これはいうまでもなく京都の將軍の館の模倣だからである⁽³³⁾。

城への入口は、構口という字名が残るので、そこにあったと考えられている。それは古くからの道である天馬縄手（てんばなわて）につながっていくから（図3・9）、ここが大手であることは間違いないと思う。天馬縄手が小川を横切るところには、「クソウバシ（九相橋）」がかかっていた。外との接点はこのように考えられるが、構口から城内への導線についてはわからない。

もうひとつ、土塁について述べておきたい。水田Cの西端に1ヶ所、土塁の跡らしき畑がある。しかし、それ以外には土塁の跡らしき地割は認められない。さらに拙稿キで述べたように、発掘結果も土塁がなかったことを示しているので、基本的に天神山城は土塁をもたなかったと考えている。堀（と塀）だけで守る居館であった。

卯山周辺の堀は湖山池に発し、山の南側を廻って、卯山南東端から北に向かうが、日吉神社の参道の辺りまでしかなかった。図9に明らかなように、天神山城と卯山の周辺の堀は無関係だったの

である。途中で切れている卯山の周りの堀が、防衛のための構築物でないことは明らかであるから、水路は布施集落への物資搬入のために掘られたもの、とするのが自然である。その最終地点には舟入が設けられていた。

水路の長さは1 km近くあり、かなり大規模なものといってよい。布施がそれほどの水路を設ける必要性のある商業地であったことについては、別稿で論じているが、その繁栄ぶりを一言でいえば、守護所がすり寄ってくるほどだった、ということになるだろうか。守護所・城下町研究の最新成果によれば、天神山城が存続していた時期（戦国前期）には、守護所は既存の商業地の近くに立地するのが普通であった。商業的機能は必要不可欠であるが、自ら作り出すほどの力はまだない、という段階の特質である。

布施を天神山城の城下町とする見方は、近世の城下町を念頭に置いた、江戸前期に作成された絵図の呪縛に掬め取られたものといわなければならない。そのようなイメージから解放され、布施の歴史を先入観なく検討するための下作業、それが本稿の目的の一つであった。そのことはひとまず果たし得たのではないかと考えている。

謝辞

寛文大図の掲載については倉田八幡宮（鳥取市馬場）のご許可を得た。その写真版は鳥取市立歴史博物館から提供していただいた。また、因幡民談記「布施城図」の撮影・掲載については、鳥取県立博物館のご許可を得た。さらに、本文中で触れた田畑地続全図の閲覧・写真撮影に際しては、鳥取県立博物館に多大の便宜をはかっていただいた。あわせてお礼を申し上げたい。

注

- 1 例えば、「時範記」（『書陵部紀要』14号，1962年，同32号，1981年）や「中書家久公御上京日記」（『神道大系 文学編5 参詣記』，神道大系編纂会，1984年）など。
- 2 山中寿夫「交通運輸の発達」（『鳥取県史4 近世 社会経済』，1981年，517頁）。
- 3 森浩一「日本海の古代文化と考古学」（『シンポジウム 古代日本海文化』，小学館，1983年），同「潟と港を発掘する」（『古代の日本3 海をこえての交流』，中公文庫，1995年），網野善彦「歴史と自然・河海役割 - 『そしえて21』の発刊によせて」（『日本中世都市の世界』，筑摩書房，1996年），井上寛司「中世石見の繁栄 - 西日本海水運の拠点 -」（『遺跡下 ものがたり日本列島に生きた人たち2』，岩波書店，2000年）など。
- 4 星見清晴「湖山池 - その生い立ち -」（鳥取地学会誌13号，2009年）。
- 5 「因幡国布施・溝口の中世 - 湖山「潟」の発見 -」（鳥取地域史研究12号，2010年，に掲載予定）
- 6 「潟港」という概念については，注3の森浩一「潟と港を発掘する」参照。
- 7 「因幡守護所・天神山城跡の構造」（中国・四国地区城館調査検討会資料集『発掘された戦国期の平地居館』，2008年）。
- 8 徳永職男校註『稲場民談記』（日本海新聞社，1958年，上巻，287頁），『因幡志』（因伯叢書3，名著出版，1972年，469頁）。
- 9 仁木宏「室町・戦国時代の社会構造と守護所・城下町」（『守護所と戦国城下町』，高志書院，2006年）。
- 10 『新校群書類従16』（内外書籍株式会社，1928年，268～269頁）。
- 11 岡村吉彦「総論 - 中世後期の因幡国における戦乱史」（鳥取県教育委員会編『鳥取県中世城館分布調査報告書第1集（因幡編）』，文化財保存協会刊行，2002年）。
- 12 倉田八幡宮（鳥取市馬場）所蔵。なお，建設省鳥取工事事務所作成の模写図を縮小印刷したものが『鳥

府志図録』（鳥取県立公文書館編，鳥府志図録刊行会，1994年）に付録として添付されていて、全体をみるのに便利である。

- 13 注8参照。なお図3は鳥取県立博物館所蔵・岡島正義本『因幡民談』所載のものである。
- 14 『鳥取県史2 中世』（鳥取県，1973年）。
- 15 『新修鳥取市史 第一巻』（鳥取市，1983年）。
- 16 『耕心』（鳥取農業高校）創刊号，1984年。
- 17 『図説中世城郭事典 第三巻』（新人物往来社，1987年）。
- 18 『鳥取県博物館協会会報』37号，1988年。
- 19 私家版，1993年。
- 20 注11所引書。
- 21 『鳥取県立博物館協会会報』71号，2005年。
- 22 立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集IV』，2005年。
- 23 『天正九年鳥取城をめぐる戦い』（鳥取市立歴史博物館，2005年）。
- 24 『鳥取県博物館協会会報』73号，2006年。
- 25 『日本海新聞』，2006年12月5～7日。なおこれは，内容的にはサと同じである。
- 26 注7に同じ。
- 27 この外に鳥取県立博物館所蔵「御留場図」（大幅絵図）があるが，一般にはあまり知られていない。これに言及したものは，小谷仲男「鳥取市山王社宝篋印塔とそれを載せる絵図について」（『鳥取大学教育学部研究報告（人文・社会科学）』第30巻第2号，1979年）だけではないかと思う。論文は卯山の麓にある山王社宝篋印塔研究のために，同図と寛文大図・民談記図を詳細に検討したもので，書誌学的研究としても非常に優れたものである。そのなかで，御留場図は寛文大図と似通った内容のものである（その違いは「写本の精度に帰せるていと判断」されている）が，前者のほうが「より原図らしいとおもう」と述べられている。掲載された天神山・卯山付近の写真をみると，確かに，御留場図のほうが寛文大図よりもきちんとして描かれているという印象を受ける。また，民談記の絵図については「復元想像図の要素が多く，史料の価値の点では『大幅絵図』に及ばないのではないかとおもう」といわれている。これも妥当な判断と思う。ただ残念ながら，今回は御留場図を閲覧するに至らなかったため，本文中の二つの絵図しか利用できなかった。
- 28 前注論文。なお以下の本文中でも触れるところがある。
- 29 全図には，神社に近いところの参道両側に水田が連なっている。これは寛文大図の水路あるいは池のようなもの（飛び石らしいものが描かれている）と同じ位置にある。この水田は池の跡なのかもしれない。
- 30 千葉乗隆編『本福寺日記』（同朋舎出版，1980年）。
- 31 千葉乗隆編著『本福寺史』（同朋舎出版，1980年）。なお，注5拙稿参照。
- 32 中森は注7論文で諸発掘成果を整理して，中世には湖山池は山の西麓まで迫っていなかったことを指摘している。
- 33 例えば千田嘉博「城郭研究の行方」（『人類にとって戦いとは4 攻撃と防衛の軌跡』，東洋書林，2002年）。

後記

鳥取大学地域学部地域環境学科では，2年次の学生に地域環境調査実習を実施している。2007・2008年度には，歴史環境班は湖山村・布施村の調査を行ない，両村の田畑地続全図のトレース図も作成した。結果はそれぞれの年度の報告書に掲載している。本稿の図9はそれを参考にはしているが，私自身が改めて作成したもので，両者の間には多少の違いがある。

（2010年1月21日受付，2010年1月22日受理）